

SETOUCHI ARCHITECTURE JOURNAL

# DOTS

瀬戸内アーキテクチャージャーナル ドッツ

JANUARY 2016 vol.3

特集 | 三津浜、建築の紡ぐ物語。

TAKE  
FREE



photo: 八木 香保里

# 岡部友彦 ロングインタビュー

# 特集 — **三津浜、建築の紡ぐ物語。**

三津浜はかつて松山の海の玄関口として栄え、太平洋戦争において空襲を受けなかつたことから、古い建築が今も数多く残るエリアです。近年は、様々なイベントが行われたり、県内外から移り住んだ方が新たにお店を開設するなど、新たな活動が街の魅力として注目されつつあります。

部屋を管理しています。それもひとつの建物だけではなく、街全体の空き部屋を合わせてひとつのお宿として見立てていく。街の中に一つだけフロントがあつて、そこにお客さんに来てもらつて、そこからそれぞれの建物に案内していく。コトラボではそういうことをやつています。

そんな三津浜の魅力を発信するスペース「ミツハマル」が開設されたのは2013年のこと。運営を行うのは横浜を拠点にまちづくりに関する事業を展開するローラボ(会社名)

―― 寿町で事業を始めて10年が経ちました

拠点に立ち、「くりはん」事業を展開する「HAN合同会社」。2015年11月には老朽化した大正時代の建築「旧濱

田医院」を再生するなど、新たな取り組みを進めて います。今回は、「コトラボ代表の岡部友彦さんに、「コトラボ・ニッハマルの事業や三津浜に関するお話を伺いました。

——まず、ミツハマルの母体である「コトラボ」についてお伺いしたいのですが、コトラボは横浜でスタートされていますね。その経緯について教えてください。

横浜の中華街から歩いて10分くらいのところに寿町という町があるんですよ。元々は日雇い労働者の町と言われていて、横浜に住んでいる人にとってはネガティブなイメージがあるところですが、僕が建築の大学院を出て寿町に入つ

た2004年にはすでに寿町の状況は変わっていました。日雇いで働いていた人たちも高齢になつていて、危ない、怖いというイメージではなく、逆に、人情味のある下町のような印象を抱いたんですね。それで寿町について調べると、日雇い労働者の人たちが宿泊をするために建てられた簡易宿泊所が、けつこう空き部屋になつてていることが分

かつたんです。建物のオーナーも困っていて、寿町に関する支援をしているNPOにも相談があつたんですが、そこからお話を受けて2005年に始めたのが「ヨコハマホステルヴィレッジ」というバックパッカー向けの宿です。簡易宿泊所がこれまで宿泊客として対象にしていた生活保護のおじさんではなく、この地域に偏見のない、海外のバックパッカーたちを呼んでこようと。その流れを作ることで、

今度は国内の日本人のお客さんとも関わることができる。  
そういう流れができれば、横浜の人が寿町に抱いていいるイメージもだんだん変わってくるんじゃないかな——そういうことを目指して始めました。建物に手を加えて、現在は50



ヨコハマ市スルベイレッジ（神奈川県横浜市）

多くの簡易宿泊所「ドヤ」が建ち並び、ドヤ街が形成されている寿町。「ヨコハマホステルヴィレッジ」はドヤの空き室の一部をバックパッカー向けのゲストハウスに変え、同地区の再生とイメージの払拭を図るプロジェクト。

なんだかキーマンがたくさんいるような街で、潜在性がある  
ような印象を受けたんですね。商店街には「フロア」、「田中  
戸」、「正雪さん」、「N's キッチン」のように魅力的なお店  
を運営している方がいらしゃるし、長く地域を支えている  
地域団体もある。そうした幾重にも重なる「層」があつて、い  
なかなかそんな街はないなと思いました。そのように地域  
の人たちが主となつてやつている中で一緒に関わつていけ  
るといいなということで「ミツハマル」をやらせてもらう  
ことになりました。

——ミツハマルでまず始めたのが「町家バンク」ですね。

まずは三津浜地区の空き家の調査を始めました。空き家を調査して貸したい人と借りたい人のマッチングを行なう「町家バンク」という事業です。それと、三津浜で行われるイベントのサポートをするという事業。二年目には三津のまちを巡ることができるよう観光用看板を作りました。

—— 今年度(2015年度)で三年目ですね。「旧瀧田医院」の改装も手がけられましたが、随分ご苦労があつたことと 思います。

『三津の古建築ものがたり』の著者である池田由美さんからお話を受けて、松山からは遠方に住まわれている、濱田医院のオーナーにお会いしたんです。オーナーもこの建物を

文化として残していくべきだという思いをお持ちでしたが、金銭的に難しくて、なかなかうまくいかなかつたようです。建物の老朽化も進んでしまって、さすがに壊そうかという

最後のタイミングで、池田さんから僕が派遣されたというか(笑)。でも、私が断ればここは全部壊されてしまうかもしない……それは嫌ですよね。建物自体もすごくいいで

すし、地域のランドマークのようなどころもあるから、うまく使える状態に戻したいと思いましたね。それと、まちづくり系の委託事業やコンサルつて「金の切れ目が縁の切れ目」のようになってしまふことがあって、そういうのも嫌で。

率直に言って行政からのお金も少なくなっていますが、そういう状況下でも地域に持続的に関わっていける「生態系」のような仕組みを作っていくたいと思っています。横浜でもいろいろな物件を活用しながら事業を行ってきたので、



(左・右上) 旧濱田医院。大正時代に建てられ、産婦人科の医院として使用された建物。右上は改装前の様子。

(右下) 三津浜の通りや建物などの歴史が解説されている観光用看板。



「濱田医院での実践を『コミュニティアセット』という考え方のひとつのモデルにしたいなと思っています」

が、そのひとつのモデルタイプになればと思います。例えば、濱田医院のような地域のランドマークや、街並みを形成しているような建物を地域で持つような感じです。元の所有者が「もう持ち切れない」といったことが現状でも生じています。「持つ」といっても、実際に購入するという方法も長期的に借りるという方法もあると思いますが、うまく活用してメンテナンスの資金や運営資金まで捻出できるような仕組みができるといいと思います。例えば、濱田医院を改装したお金を少しづつ返済して、全部返済できたら後に、少しづつ運営費が貯まっていくとしますよね。それで次の建物の改装をする資金にできたら……そう展開できれば、地域に小さいお店が入るようになるし、街並みが確立できんじやないかと。そういうことができるといいですね。

——濱田医院は改装したばかりですか、長期的にはどのような展望がありますか。

——それで濱田医院の一部の賃貸を始めたんですね。濱田医院では「三建浜ハンドメイドマーケット」も始まりましたね。

同じような形で濱田医院を活用して運営費を捻出しようと  
考えています。



古い建築の残る三津浜の中でも「三津の渡し」のある三津1丁目の一角はかつて商人の街として賑わったエリアで、今も往時の佇まいがところどころに見受けられます。明治30年代に建てられたとされる旧鈴木邸もその一つ。この建物のオーナーである岡崎麻祐子さんは、その魅力に惹かれて吉民家を購入。空き家となっていた旧鈴木邸でしたが、時間をかけて掃除や改修工事を実施。改修が終わった現在、建物を利用して様々な催しが行われています。2015年11月には、郷土史家の越智公行さんによるお話会「三津のデザイン」が開催され、三津の建物や街並みに見られるユニークなデザインのポイントが解説されました。会場として利用された一室には大きな火鉢が置かれていましたが、これはかつて三津浜でレンガや土管を製造していた「三津浜煉瓦株式会社」が製造したとも伝えられています。一階



それらの瓦がひと際輝いて見えるのは、建材としての優れた特性はもちろん、施主や職人たちの熱き想いとあたたかな愛情が宿つているからかもしれません。

「腕を競いよつたんじやけんね」。職人の切磋琢磨によつて造形技術が向上したと語るのは、この道六十年の鬼師・吉井昭二さん（吉井鬼瓦製作所）。街は活気に満ちていたといいます。しかし美しい瓦がひしめき合う人々を眺めていると、競っていたのは職人だけではなかつたことが想像できます。長寿を表す鶴亀や松竹梅、農業や漁業の神様として慕われている大黒天や恵比寿天、魔除けや火伏せを表すかたちなど多種多様な瓦があるなかで、それらをどう配置し組み合わせるか。もしくはオリジナルの瓦をつくるかなど、瓦ひとつひとつから一世一代の家づくりに情熱を注いだ施主の想いやメッセージを読み解くことができるのです。

それらの多くは今治市菊間町でつくられた「菊間瓦」。上品ないぶし銀と、ダイナミックな立浪（波しぶき）のフォルムが特徴的です。産地として栄えた理由は、瓦に適した五味土が採れること、乾燥に適した気候だったこと、農閑期の人手があつたこと、出荷の経路（海路）が栄えていたことなどいくつかの要因が重なったからと伝えられています。



## 瓦に入れられたメッセージ

写真・文 | 今村香織



松山・伊予縫会館の巴瓦に施された「縫」の文字。



久万高原の民家。おじいさん(?)のようなオリジナルの飾り瓦。



宇和島の民家。構成がダイナミックで美しい鷹と松と亀。



内子の民家。「寿」の文字におじいさんと龍が絡まっている。



宇和島の神社に祀られている漁業の神・恵比寿天。大きな鯛を抱えている。



松山の民家の飾り瓦。打出小槌を持ち、大きな袋を背負った大黒天。



明浜の民家。縁起が良い松竹梅に福良雀（ふくらすずめ）。



内子・内子座の屋根にはたくさんの狐が顔をのぞかせて手招きする。



砥部にある酒蔵の鬼瓦には火伏せを意味する「水」の文字。



今治の民家の立浪型鳥伏間。孫悟空の筋斗雲を思わせる。



大島の民家の立浪型鳥伏間。波のかたちがシャチホコを連想させる。



内子の商家の大きく立派な帆かけ。

### DOTS vol.3

2016年1月発行

著者 濑戸内アーキテクチャーネットワーク  
発行人 白石卓央  
発行所 濑戸内アーキテクチャーネットワーク  
790-0923 愛媛県松山市北久米町912  
setouchiarchinet@gmail.com

\*このフリーペーパーは、『坂の上の雲』フィールドミュージアム活動支援事業の助成を受けて発行しています。

Setouchi Architecture Network All rights reserved  
www.setouchiarchinet.com  
setouchiarchinet@gmail.com



### 編集後記

2015年に『三津浜マレバト事典』という冊子をつくりました。『道後装飾事典』に続く、市民ワークショップを基にした「街」の事典第二弾です。これは三津浜に移住された方をはじめとする「人に注目した内容ですが、活動を通じて、新たな活動が起こっている三津浜のいわば下地となる歴史、その歴史を物語る建築の力をあらためて実感した次第です。



### 三津浜の建築マップ

三津浜地区で見られる主な古建築のマップです。伊予鉄高浜線 三津駅には松山市駅から13分。三津駅の隣りの港山駅で下車し、渡し船「三津の渡し」(無料)に乗ってのアクセスも可能です。